

2 現地における果樹凍寒害の発生状況

県内の果樹栽培は、小規模ながら常緑果樹から落葉果樹に至るまで多品目の樹種が栽培されている。

樹園地は傾斜地がほとんどで、気象条件も多様なことから地域の微気象による影響も受けやすい。ここでは、とくに問題となっている凍寒害について、常時危険にさらされているクリ、ビワ、イチジクの3樹種を中心に現地での発生状況を報告する。

1 クリ

クリは、県内で831ha栽培されており、全国8位を誇っている。摂津丹波地域（篠山市、宝塚市、川西市、猪名川町、三田市）及び西播地域が主要な産地を形成している。

地域特産物として中山間地域を中心に、クリの振興が図られ、最近10年間で30ha以上の新植と5ha以上の改植が行われている。ところが、若木時代

（5年生以下）に、凍害の洗礼を受けることが多く、成園になるまでに超えなければならない壁となっている。クリの場合凍害は即枯死につながるためその影響は大きく、振興上の阻害要因となっている。

篠山普及センターでは、平成4年から綿密な調査を行い、同7年まで延べ4278本中1031本の被害を確認している。このうち462本は枯死している。

その後、株ゆるめ処理、糖蜜処理により被害率は低下しているが、平成7年から11年までの調査では、毎年0.5～1haの被害を受けている。神戸（三田支所）でも、ここ5年間で1haの枯死と8haの生育遅延の被害を受けている。

柏原・宝塚・西脇・加西普及センター管内でも被害の報告があり、水田での植栽のみでなく、造成畑での発生もあり、被害は県下全域に及んでいる。

2 ピワ

ピワは、82ha 栽培されており、全国で7位を誇っている。主な産地は南淡町と北淡町で、両産地とも歴史は古く、急傾斜地に栽培されている。ピワの場合、樹体が寒害を受け枯死することはなく、もっぱら果実が受ける被害となる。

最近の被害状況を見ると、南淡路普及センター管内では、平成9年出荷分で平年比70%減の大きな被害を受けた。10年産も45%、11年産も20%の被害を被っている。また、北淡路でも同様に平成9年は、30%減であった。ここ2年間は、平年比10%減の被害が続いている。

寒気団の規模、期間などが直接的に影響しているが生育ステージの進み具合、産地内での局所被害など状況により、被害程度、場所に差が出ているという特徴がある。果実自身に被害が出るので、大きな寒害は、生産意欲をそぐことになり影響は大きい。

3 イチジク

イチジクは、都市近郊の立地を生かして84haの栽培があり、全国3位である。主産地は、川西市、神戸市、加古川市、姫路市、小野市、津名郡である。

イチジクは、とくに寒さに弱いため栽培地は温暖な地域に限定されるが、収益性が高いことからその北限は伸びている。

しかし、厳寒期から春先にかけての気温が栽培の制限因子となっている。イチジクの凍害は、胴枯れ病や赤ころも病の併発、カミキリムシの食害、日焼け等により助長されるので凍害の様相は複雑である。最近の報告でも、厳寒期の低温による被害はないが、春先の生育遅延と病害等の要因（前述）との合併症が各産地で見られる。

4 その他

その他の樹種では、カンキツ類の落葉、果実のす上がり、ブドウの晩霜による新芽の枯死、開花の早いウメ、モモの花枯れの報告がされている。

武久 正篤（中央農技・普及指導室）